



两座庙的兴废

北基行 記

北京市 西城区虎坊路 湖広会館の京劇

二廟の興廢について

偶然機会があって、このあいだ古北口を通り抜けその先にある、“楊家廟”を参観した。ちょうど修理が終わり、あれと思うほど、きれいになっていた。帰りに潮白河に沿って狐奴山の麓を歩いて、もうひとつの“張公廟”を尋ねた。何とここは瓦礫の山がむき出しで、廟屋は見当たらなかった。この二廟の盛衰、移り変わりを目の当たりにして、うたた感慨を催すことを禁じ得なかった。

古北口の“楊家廟”は文化機関の支援資金で復興された。廟には、ここを管理する道士が寝泊まりしており、遠近を問わず、復興を聞いてやって来る人は多い。楊家將の伝説は、地方に根付き、人の心に深く刻み込まれているから、各地方は郷土の歴史を持ちたいので、なんとか楊家將と関係づけたい気持ちは理解できる。しかし、歴史資料と突き合わせると、伝説はあくまで伝説であり、これを歴史上の事実とすることは難しい。

『宋史』『楊業傳』はこう述べている。“業老 辺に於いて事とし、代州に遷り、三交駐泊兵馬都部署を兼ね。……契丹 雁門に入り、業 麾下数千騎を領いて、西京より出づ。



中国 DVD 少年楊家將

小径より雁門北口に入り、南に背向して之を撃ち、契丹大敗す。功を以て雲州觀察使に遷り、仍お鄭州、代州を判す。是より契丹 業の旌旗を望見すれば、即ち引きて去る。……雍熙三年、大兵北征し、忠武軍節度使潘美を以て雲、応路行營都部署と為し、業に命じ之に副たり。……雲、応、襄、朔四州を連ねて抜き、師桑干河に次す。”楊業が戦に負けて捕まる所も雁門関以北の陳家谷口である。このように“老令公”が活動した地域は、雁北、察南に限られており、古北口付近までは延びていない。

楊業の息子楊延朗（後に延昭と改名）、孫の楊文広は、『宋史』に小伝があって、『楊業傳』の後が附されている。延朗は初め父と朔州の前線に出て、先鋒を務めた。

後に彼自身の任地、莫州、保州、高陽関に赴いた。その地は現在で云えば、河北の任丘、清苑、高陽の各県境境であって、古北口あたりからは相当の距離がある。文広は、最初范仲淹に従い、陝西に在り、狄青に従って広西に往った。これは別にしても、後に成州の団練使、興州の防禦使、定州路の副都総管に任命された。これらの地方は現在の河北省、清苑、定県、山西の興県等の地区で、古北からはるか彼方である。

このように述べてくると、民間に広がっている楊家將故事そのものが、相当のこじ付けがあって、歴史事実とあわない。しかも、楊家將の活動した場所と古北口は何ら関係がないことは、あきらかである。古北口なる長城の要塞は、歴代の愛国英雄が流血苦戦した遺跡であり、往時を偲ぶことのできる場所として、手厚く保護されるべきである。ところが、関口は依然として一片の荒地のままで、なんら整備されていない。というのに、この地と何の縁もゆかりもない楊家廟だけを、修理一新させるとは、真に奇妙なことだ。まあ、廟内に配置された塑像のつくりは相当拙劣なことはいうに及ばないが。

この楊家廟に比べてひどいのが、“張公廟”だ。狐奴山麓を流れる潮白河のほとりに、ひっそりとある。もう崩壊してしばらく経つが、だれも構おうとしない。張公廟は東漢武帝時代の張堪の廟宇で、彼は文武両道に秀れた人物であった。

『後漢書』『張堪傳』はこのように云う。“張堪、字は君游、……匈奴を高柳に撃破し、漁陽太守を拝す。

……匈奴嘗て万騎を以て漁陽に入る。堪数千騎を率い奔撃し、大いに之を破り、群界以て静む。乃ち狐奴に稲田八千余頃を開き、民に耕種を漢勸め、以て殷富を致す。百姓歌に曰く、桑に附枝無し、麦穂兩歧す。張公政を為し、樂支えるべからず。”これは、我が国が北方に稲を植えた歴史であり、それを張堪が二千年も前に始めたのだ。

順義県にある狐奴山の麓には、今もいくつかの村が残っているが、そこが史上はじめて稲作をはじめた区域である。ここまで来ると、小橋、せせらぎ、葦池、土手の柳や、これらに挟まれた水田に至るところに見ることができる。この風光は正に北国の江南であり、のどかな風景に見とれて還る時間も忘れるだろう。

私が見つけたかったこの“張公廟”の跡地は、県志の記録には、倒壊してもう何年にもなるという。当地幹部の言う事には、碑が二基残っていたが、それも壊されて道路の舗装に使われたという。

この廟の荒れ果てたさまを見て、翻って新修なった楊家將廟を思うと、人々に割り切れない気持ちを懐かせることは、申すまでもないが、私はこのように思う。この二廟について申せば、楊家廟が修理の価値があるならば、張公廟も同様に修理する価値がある。張公廟が重視する価値がないならば、楊家廟は重視する価値がもっと低いということだ。問題を比較検討することは、この両廟のみならず、他の類似問題においても、合理的回答を得るヒントになるのではないか。



楊家將 ドラマ戦闘シーン

【語句解釈】

桑無附枝、麥穂兩歧——桑の木に枝分かれが少なく、麦の一本の茎に二つの穂がついた。好い政治のおかげで、村がよくまとまると、一本の茎に二穂がなる、お目出たい兆しがある。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

『两座廟の荒廢』 ひとそえ

歴史遺産、文化遺産といえ雑誌『文物』を思い出します。1973年頃にこれをテキストを使って中国考古学や比較文化のあらましを講義してくれた桑山龍平先生（大学院時代は増田渉先生の弟子で、魯迅の孫弟子）の話を紹介します。1971年発行の『文物』に和同開珎を通じた日本と中国の交流の話題が載っていました。桑山先生は「中国は用意周到ではないか。ニクソンや田中角栄が北京に握手をしに行く何年も前から、こういう地味な学術雑誌に日本の貨幣である和同開珎が中国に渡来していたことをさりげなく載せている」



雑誌「文物」

1972年以前の中国メディアは台湾寄りの佐藤政権は相手にせずといった論調で、日本のメディアもそれを真に受けて悲観論が横溢していました。しかし中国政府は文物や歴史を使って、人民の反日意識改善と日本との「溝通」(コミュニケーション)を周到に手配していた一例です。第27話の背景は、契丹と戦った楊家の人々の武勇伝です。過分に褒め称えられる「楊家廟」と見捨てられている「張公廟」、各々当時の誰を比喩対象にしているのでしょうか？西北地域ということでこじつげると、習仲勳、劉志得さらには高崗らの延安拠点を準備していた人たちの名前が浮かびます。

井上邦久

两座庙的兴废 原文

最近有一个偶然的机会，路过古北口，参观了一座“杨家庙”，新修的庙宇，煞是好看；回来路过潮白河畔的狐奴山下，又寻访了一座“张公庙”，却只剩下一堆瓦砾，已经看不见庙宇了。这两座庙的一兴一废，使人不禁会发生一些感慨。

古北口的“杨家庙”是经过文化机关拨款兴修的庙宇，并且由住在庙里的道士负责看管，远近闻名，参观的人很多。由于杨家將的传说，流传久远，深入人心，各地方的群众都希望自己本地的历史，与杨家將能够发生某些联系，这种感情是完全可以理解的。但是，如果认真考察实际存在的历史文物，我们就不能把传说当做真迹。

据《宋史》《杨业传》称“业老于边事，迁代州，兼三交驻泊兵马都部署。……契丹入雁门，业领麾下数千骑，自西京而出，由小径至雁门北口，南向背击之，契丹大败。以功迁云州观察使，仍判郑州、代州。自是契丹望见业旌旗，即引去。……雍熙三年，大兵北征，以忠武军节度使潘美为云、应路行营都部署，命业副之。……连拔云、应、襄、朔四州，师次桑干河。”最后杨业战败被擒的地方，也是在雁门关以北的陈谷口。可见这位“老令公”活动的地区，始终只在雁北、察南，根本没有到过古北口附近。

至于杨业的儿子杨延朗（后来改名为延昭）、孙子杨文广，在《宋史》上都有小传，附于《杨业传》后。延朗最初随他父亲到过朔州前线，当过先锋，后来他自己作战的地方，就在莫州、保州、高阳关等处，即现今河北的任丘、清苑、高阳各县境，离古北口很远。文广最初随范仲淹在陕西，随狄青到广西，这且不说；后来任成州团练使、兴州防御使、定州路副都总管，这几个地方也都在现今河北的清苑、定县，山西的兴县等地，也离古北口很远。

如此说来，不但民间流传的杨家將故事本身，有许多牵强附会，不合历史事实；而且，杨家將的活动根本与古北口没有关系，这是非常明显的。古北口这个历代爱国英雄流血苦战的长城要塞，的确很值得认真保护，让人们往来凭吊。可是，如今这个关口仍然是一片荒凉，没有修整；却偏偏把一座与此地无关的杨家庙修缮一新，这真叫人莫名其妙。至于庙内所有的塑像都十分拙劣，就更不用提了。

与这座杨家庙的情形相反，在潮白河畔的狐奴山下，有一座“张公庙”，却久已毁坏，一直无人理睬。这座张公庙是纪念东汉光武帝时期一位文武兼长的著名人物张堪的庙宇。

《后汉书》《张堪传》载“张堪字君游，……击破匈奴于高柳，拜渔阳太守。……匈奴尝以万骑入渔阳，堪率数千骑奔击，大破之，郡界以静。乃于狐奴开稻田八千余顷，劝民耕种，以致殷富。百姓歌曰：桑无附枝，麦穂两歧；张公为政，乐不可支。”这就说明，我国北方种稻的历史，是从二千年前的张堪开始的。

现在顺义县狐奴山下有若干村庄，就是历来种稻的区域。你如果走到这里，处处可以看见小桥、流水、芦塘、柳岸，穿插在一大片稻田之间。这才真的是北国江南，令人流连忘返。

按照县志的记载，我找到了这座“张公庙”的遗址，然而，它却已毁坏多年了。据当地干部说，从前还有两块碑，也被弄去铺路了。

看了这个庙荒废的情形，同杨家庙兴修的状况相对比，给人的印象如何也就可想而知了。我以为，就这两个庙宇来说，杨家庙如果值得兴修，张公庙就更值得兴修。张公庙既然不值得重视，杨家庙也就更不值得重视了。这样从比较中看问题，不但对于这两座庙，即便对于其他类似的事情，大概也是合理的吧！